

小田原史談

第70号

発行所 小田原史談会
小田原市西栢山3310

年頭雑感

小田原市長
中井一郎



新年あけましてお目出とうございます。

昭和四十九年の新春にあたり、史談会会員各位のご健勝を心からお祝い申し上げます。

私は昨年二月に市長として二期目の就任をしました。が、もとより市勢の発展と市民福祉の向上をつねに念頭において諸施策の遂行に微力を傾けてまいりました。

特に市民生活をとりまく自然環境の保全、市民文化

向上に極めて重要な意義を有する文化財の保護、保存施設の整備等は重要施策としてとりあげ、文化財保護については昨年四月に機構改革を行ない、文化財保護課を新設、その機構を通じて行政内容の充実を図ったのであります。

また、自然環境の保全に

ついては「緑と水の豊かな住みよい都市」を標榜とする市の総合計画に基づき諸施策を実施し、自然を破壊することなく県下で最も

緑が多い小田原市をいつまでも住みよい郷土、清潔で健康な都市として将来も守って行きたい所存であります。

史談会会員各位には、いつも文化財保護のため、各

地の史跡の探究や歴史の研究活動に邁進され、本市文化財行政のため大いに協力をいただき、多大の成果を収めておられることに敬意を表するとともに心から感謝しあける次第であります。

本年の干支は「とら」であります。「とら」は小田原には特に縁が深いものが、あり発展の年として大いに期待しております。

最後に会員各位のご健勝のご多幸をお祈り申し上げて年頭の感したことをいたします。

年頭のさいさつ

小田原史談会長
井上英一



昭和四十九年の新春を迎へるに当り、謹んで御祝詞を申し上げます。

戦国の世、一世紀にわたって関八州の覇をとなえた小田原北条氏が、常に公文書に用いた朱印に北条氏虎の印判があります。印文には「禄寿応穩」とあって、これは長命の天寿を全うして、国の安穩にこたえるの意と聞いております。

そして地方文化発展のため御尽力たまわりますようお願い致します。

とえにお願い致します。

ところで今年には甲寅（キネトウ）年にあたり、同干支は六十年毎に繰り返すので、

左にご参考まで少し述べてみますと

(支) 子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥

(干) 甲乙丙丁戊己庚辛壬癸

故に来年は乙卯（キノトウ）年になります

本年より逆上って六十年毎の年を例記すると

昭和四十九年甲寅年（一九七四） 百二十四代 今上天皇

大正三十八年（一九一四） 百二十三代 大正天皇

大隈重信内閣

第一次世界大戦

日本軍 山東半島に上陸

日本軍 青島占領

安政元年申寅年（一八五四） 百二十一代 孝明天皇 徳川家定

幕府ペリーと和親条約締結

日露和親条約（下田、箱根、長崎）を閉港 エトロフ、ウルップ両島間を日露

国境と判定、樺太を雑居地とす

寛政六甲寅年（一七九四） 百十九代 光格天皇

徳川家斉

俵約令を十年延長

享保十九甲寅年（一七三三） 百十四代 中御門天皇 徳川吉宗

室鳩巢死去（七十七歳）

小石川菜園に甘藷を試植

以上のとおりであります

何とぞ今後よろしくご指導ご支援の程お願い申し上げます。

松尾芭蕉と曾我

神保 栄

芭蕉は古里を出て江戸に往く途中小田原城下で曾我の里を偲ぶべく来たり、曾我谷津八左エ門方に泊り、里人に俳句を教え、曾我八景及び七不思議を選定した

当時の曾我谷津村は名主外本百姓二十七軒、無田二十

一軒、隠居五軒、定使一軒

商人二軒、大光院、城前寺

法輪寺、正鉢寺、稻荷社と

宗我神社に禰宜二軒があっ

たのみで小田原の高札場ま

で二里もあつた。里人は芭

蕉が曾我出立の際六本松ま

で送った。

ほととぎす鳴き鳴き

とんでいそがわし

芭蕉

幻庵北条長綱公 生誕四八〇年祭

さる十一月四日は幻庵生誕四八〇年目にあたる。そこで幻庵公顕彰会（立木望隆）主催、小田原史談会（達志の阿氏が登壇し、井上井上英一）その他関係団体が後援して、つぎのような記念講演会が盛大に催された。

- 委員 加藤誠夫先生
- 大森氏と岩原城
- 足柄史談会副会長
- 保田宗良先生
- 大森氏と宗教文化
- 東泉院住職
- 岸 達志先生
- 中世城郭の疑問点
- 小田原城郭研究会長
- 難波 明先生
- 幻庵おぼえ書といのこ餅
- 日本仏教民俗会員
- 木村 博先生
- 北条幻庵の生誕
- 小田原市文化財保護
- 委員 立木望隆先生
- 茶席 田中良仙先生
- 展示室
- 北条幻庵おぼえ書 ほか

当日は快晴にめぐまれ、遠く岡山県井原市、東京、静岡各方面から一八六名が参会し、終始なごやかにそ

- 講演 大森氏と春日山城
- 南尾柄市文化財保護
- ※ 茶席 二階
- ※ 展示室 三階
- ※ 講演 二階
- ※ 久野保育園 会場



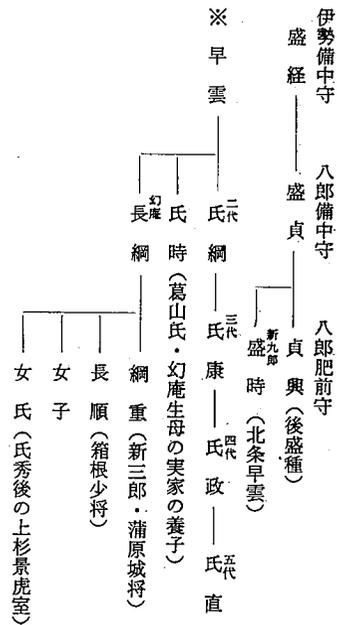
宗哲の詠めるうた
花散れば別れをいそぐ言の葉の
茂り合ふ日をいつと待ちみん

幻庵

大森氏の祖は藤原尹周に始まる。その子忠親その子惟康三河国高橋庄に移り、その子三代親康駿河国大森郷に居住す。親康の弟惟兼は同所葛山に住み葛山氏の祖となる。

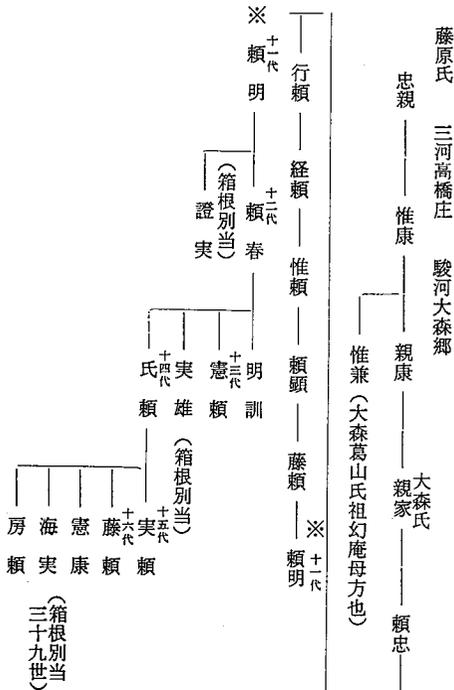
四代親家 始めて大森氏を

北条幻庵三郎長綱略系図



- 父 伊勢新九郎長氏 (盛時)
- 母 葛山備中守女
- 生年 明応二年 (一四九三) 秋即ち四八〇年前
- 幼名 伊勢菊寿丸 (葛山三郎とも称す)
- 通称 北条三郎長綱 (駿河守とも)
- 入道名 幻庵宗哲
- 法名 金龍院殿明宗哲大居士
- 没年 天正十七年十一月一日

大森氏略系図 (乗光寺系)



五代頼忠 称す 大森城を根城とし小山町竹ノ下城に進出しさら

に生土城を築く 七代経頼 八代 十五代実頼 父氏頼に先立ち文明十五年(一四八三)七月十六日亡

十代藤頼 相模進出をねらう 十六代藤頼 明応四年(一四九五)北条早雲に小田原城を奪わる

十一代頼明 足柄上郡内山村に春日山城を築き大雄山最乗寺建立に際し了庵慧明をたすく

應永二年(一三九五)小田原城築城、応永十二年九月十四日 明応二年(一四九三)一月二日、早雲三島明神の夢告を得。秋、三男菊寿丸(長綱)生まる。生母は葛山氏

十二代頼春(道光) 足利 永正十二年(一五一五)、北条三代氏康生まる。幻

十三代憲頼 河村城を攻略す。応仁元年(一四六七)三月廿三日亡

十四代氏頼 岩原城を根城とし、管領上杉定正に従い、文

武兼備の名將と うたわる。明応三年(一四九四)八月廿六日亡。 七六歳

父氏頼に先立ち文明十五年(一四八三)七月十六日亡

明応四年(一四九五)北条早雲に小田原城を奪わる

北条幻庵関係 明応元年(一四九二)春、北条早雲(伊勢新九郎)足柄茶々丸を攻め伊豆垂山に拠る。入道し早雲庵宗瑞と称す。六一歳

十歳 幻庵母栖徳寺殿亡。(幻庵六十二歳)

大永六年(一五二六)、このころ長綱箱根別当第四十七世をつぐ。三十四歳

天正七年(一五三八)、このころ長綱箱根別当を退く。四代氏政生まる。(幻庵四十六歳)

天正十二年(一五四三)、幻庵長綱印判「静意」初見

天正十四年(一五四五)、二月廿六日、連教師谷宗牧久野の館に来る。翌年

幻庵松山へ出陣 天正二十一年(一五五二)氏康・幻庵上州まで出陣し上杉憲政を追い関東一円を治む

天正二十三年(一五五四)三月、武田・今川・北条三國同盟成る。四月五日

天正十八年(一五九〇)七月、小田原北条氏滅ぶ。

北条幻庵四八〇年祭に寄せて

中里 史子

幻庵忌空美しく晴れわたり

雅やびにひそむ集いたのしき

いくとせ幻庵跡守りて

変らざる君が熱意の報われたる日

こもごもに歴史を語る人々の

熱のこもれる話つきざり

幻庵の雅やびを慕ふ集いて

床しかりけり茶席のしつらえ

久野の里幻庵草舎のおん主

今日の日を恵ぐまれ給ふ

(一九七三・一一・一〇)

太田道灌と山吹姫

内田 武雄

七重八重花は咲けども山吹の実の一つだに なきぞかなしき 太田道灌が武蔵野で鷹狩のかへりに、にわか雨にあ

いある一軒家にたどり付き 家の中より出て来た若き女に、簀をかりたいと申した

ところ、若い女はいそいで 裏庭より山吹の花一枝手折りてさしだしたらば、道灌

は花をもとむるにあらずと 怒りて帰りに是を聞きし人、さてさて道灌はまだ

歌道にくらいと言われたの で、さっそくお寺の住職を

たずねて、このことに付いて おききしたところ。これ

は古歌で前中書王兼明新王 の作で、こうゆう歌がある

の作で、こうゆう歌がある 七重八重花は咲けども山吹

の実の一つだになきぞかな しき。 その時の娘さんはこの歌

になぞらえて、簀をおかし したいのだが簀がないので

その後一心に歌道にはげみ 有名な歌人になったと言わ

れている。 この山吹姫と言われた人

の本名は紅血と言ふ。母は 京都の公卿家の雑仕で、歌

は母にならったと言われて いる。その後紅血は江戸城

に召されて、道灌のめかけ になった。紅血の兄(小平

大)も其後野かじをやめて 道灌の足軽となり江戸氏の

どうせいをさぐる。兄小平 太とはいつわりで、実は紅

血の夫で、おじいさんと三 人で、クスパイクをはたら

いていたことが、はっかく して、おじいさんは道灌の

名により小平太がやもうえ ず父の首をはねるはめにな

った。その夜、首は江戸城 の前にさらされた。小平太

と紅血はその首をうばって 北条早雲の居る奥国寺城に

「小田原史談会事始」の記

大正七年

(末次富士子夫人聴書帳より)

中里 史子

末次夫人は青山学院、日本女子大出身、若い頃雑誌「婦女界」の記者生活十年、現在小田原家庭裁判所調停委員。

父も母も実に変った人達で、荒久海岸の浪音が高く聞え、縁側に立つと、西の方に双子山がよく見えまし

父君中井錦城氏は明治五年岩国の生れ、赤門(東大)の法科第一回首席卒業生、読売新聞初代主筆、父君及御当人のお仕事の関係で、明治、大正、昭和に涉り、

その父がふと云ひ出して『小田原は歴史的にいろいろ豊富な所だから、ひとつ有志で小田原の歴史を研究する会を作ってみてはどうか?』

実に沢山の有名人に接する機会を持たれ、貴重な体験と話題を豊富に持たれるので、そのままにするのが如何にも惜しく、折に触れてお話を伺って記録しておくことにした。これはその聴書帳の一部である。

そこで早速隣家のハクンヨン(中井家で北原白秋につけたニックネーム)に呼びかけた所『そりゃいい』というので、会の名を父がつけて「小田原史談会」

身体が弱くて小田原十字町のお花畑に、母が出養生して居りましたが、そこへ平生忙しくて席の暖まる暇もない父が、珍らしく訪ねて来た折のことです。

白秋がお花畑に住んだのは、白秋年譜によると大正七年春とありますから、今から、約五十五年前のことです。

会場の場所と日時がきまつて、あちこちに通知が行ったようです。場所は母の借りて居る家、古い大きい家

この時の会がその後どうなったか?勿論今の史談会とは関係ないことでしょうが、とにかく、半世紀以上前は奇抜な「小田原史談会」が発足したので。

その会の折印象的だったのは、福田正夫がとても大きな声で、白秋の「野茨に鳩」の詩を朗詠したことで

散って下ふ(以下九章略)

す。これは十一の連章を積みかさねた長い長い詩で、當時白秋は思ひがけぬ旧門下の飯逆にあい、深い苦悩の中から生れた、みごとな抒情詩です。それを若い福田正夫が、自分自身陶醉し乍ら、情熱的に歌って居た情景が、とても際立って印象的で、今でもハッキリ目に浮ぶほどです。

「野茨に鳩」 北原白秋

おほ ほろろん ほろろん

せんが、その日の白秋一門の行動だけが、際立って印象に残っています。白秋については又別の折にお話することに致します。

ウメの桃源郷

曾我兄弟にゆかりの曾我の名所。一〇〇年以上の伝統を誇る約二万本の曾我梅林のウメも一輪と咲き初め、二月三日から寿獅子舞撮影会、俳句、短歌大会等多彩な行事が計画されています。一眺ウメの花の原と化す梅林は東京方面からの人も増加、昨年は約二万人の観梅客でにぎわった。

――編集後記――
笑福万来。おめでとうございませう。
本号でようやく七〇号となりました。今年は創立以来二〇周年目にあたりますが、本会が今日の大をなしたのには、先輩諸兄姉の愛らぬ熱意と努力のたまものであり、文化を愛する人々歴史を愛する人々、郷土を愛する人々の結集された力によるものと確信する次第です。編集内容をより充実したものにすためにも、みなさんの原稿がぜひ必要本会に対する御意見、御感想、御希望或いは研究、創作、随筆なんでも結構です。どしどしご投稿ください。

日光にて

広沢 十五夜

手を打てば鳴く鳴龍の堂成りて

美観絢爛と眼をうばわるる

外国人もまろえて仰ぐ陽明門

朱色に映える杉の大樹に

名匠の技倆たたえつ仰ぎおり

日光のシンボルこのねむり猫

とうとうと落ちこむ壯嚴を秘めたる

華嚴の滝に目を見張り佇つ

秋深む山の湖水は風ぎ渡り

男体山を底に沈みます